

仙台市文化財調査報告書第138集

# 大野田古墳群

発掘調査報告書

1990. 3

仙台市教育委員会

仙台市文化財調査報告書第138集

# 大野田古墳群

—発掘調査報告書—

1990. 3

仙台市教育委員会

## 序

日頃、仙台市の文化財保護行政に対しまして多くの御協力をいただき、誠に感謝にたえません。本年度は仙台市にとりましても市政施行100周年を迎えるとともに、全国第十一番目の政令指定都市に昇格するという大きな区切りの年となりました。仙台市の南部に位置する大野田地区におきましても、高速鉄道（地下鉄）の開通後、周辺地域の土地区画整理や都市計画道路の整備が進められ、地域環境が大きく変わりつつあるところであります。こうした動きの中で開発に伴う発掘調査が頻繁に行われ、年毎に先人の生活文化の様相が少しづつ解明されつつあることはよろこばしい反面、遺跡の保存に関する種々の問題が露呈していることも事実であり、文化財保護の問題となっていることも否めないところであります。

さて、この度発掘調査いたしました大野田地区は、古くから水田地帯として開けていた地域であります。その中に春日社古墳や玉の壇古墳、鳥居塚古墳などの古墳が点在しており、仙台平野の古墳文化の展開を知る上で重要なところとなっております。調査におきましては、古墳時代の人々の生活の痕跡の一端が明らかにされ、大野田古墳群を解明するための一助となる成果が得られております。こうした文化遺産を市民の宝として永く後世に継承していくことは、これから「まちづくり」には欠かせない大切なことあります。今後とも市民各位の御協力を念願して序といたします。

1990年3月

仙台市教育委員会

教育長 藤井 黩

## 本文目次

序文	
例言	
I 調査に至る経過	1
II 調査要項	1
III 遺跡の位置と環境	3
IV 調査の方法と経過	5
V 基本層位	6
VI 検出遺構と出土遺物	9
(1) V層検出遺構	9
(2) VI層検出遺構と出土遺物	10
VIIまとめ	23

## 例　　言

1. 本書は共同住宅（アパート）建築工事に伴う大野田古墳群の発掘調査の報告書である。
2. 大野田古墳群の遺跡範囲については、従来の文化財台帳の登録範囲では不十分であると判断されたため、範囲を修正して登録している。今回の調査地は、修正後の大野田古墳群の範囲内に入ることになり、「大野田古墳群」発掘調査として報告する。
3. 小溝状遺構群検出種子の同定について、東北大学農学部星川清親教授に御教授いただいた。
4. 本書の文章及び実測図中の方位は磁北で統一してある。因に調査区の南北ラインは10°東偏している。
5. 本書中の土色は「新版標準土色帳」（小山・竹原：1973）を使用した。
6. 遺構配置図中に任意単点を設けて標高を明示した。
7. 第1図は仙台市仙塩広域都市計画図2500分の1の一部を縮小して使用したものである。
8. 第2図は建設省国土地理院発行の25000分の1「仙台市南西部」「仙台市南東部」の一部を縮小して使用したものである。
9. 報告書作成のための整理、本文執筆、編集は主浜光朗が行なった。
10. 本調査における出土遺物、実測図、写真等の資料は、仙台市教育委員会で一括保管しているので活用されたい。

## I 調査に至る経過

大野田古墳群は、仙台市南部、郡山低地の自然堤防上に位置し、春日社古墳や鳥居塚古墳、王の壇古墳等7基の古墳が確認されている遺跡である。近年遺跡の所在する地区周辺では、高速鉄道（地下鉄）の開通、都市計画道路の整備等開発が推進されており、急速に田園地帯の姿が変容しつつある地域である。その中にあって大野田古墳群は、春日社古墳、王の壇古墳の他は全て既に削平されており、現在の住宅地や、水田の下に埋没しているため、全体の範囲や古墳の数については明らかにされておらず、遺跡の内容の解明が急がれているところである。

1989年6月25日付で、株式会社萩野工務店より「大野田古墳群」として仙台市文化財分布図に示されている境界線の西辺に接する、仙台市太白区大野田字千刈田20・21-1にかかる地区2316m<sup>2</sup>について、共同住宅（アパート）建築にかかる発掘届が提出された。仙台市教育委員会では申請者と協議を重ね、大野田古墳群が当該地まで及んでいることが予想されたため、1989年7月4日より試掘調査を実施した。その結果、溝状遺構、ピット等の遺構及び土器片、埴輪片等の遺物が検出され、大野田古墳群の遺跡範囲が当該地区よりさらに西側に広がっていることが確認された。これをうけて再度申請者と協議を行ない、工事により遺跡が損なわれる範囲約643m<sup>2</sup>について、記録保在を図ることを目的とした発掘調査を行うこととなった。発掘調査は1989年10月25日より開始した。

## II 調査要項

・遺跡名：大野田古墳群（仙台市文化財登録番号C-054、宮城県遺跡番号01361）

・調査場所：仙台市太白区大野田字千刈田20・21-1

・調査対象面積：約2316m<sup>2</sup>（建築物敷地面積 約643m<sup>2</sup>、発掘面積 約593m<sup>2</sup>）

・調査期間：試掘 自 1989年7月4日 至 同7月6日

本調査 自 1989年10月25日 至 同12月27日

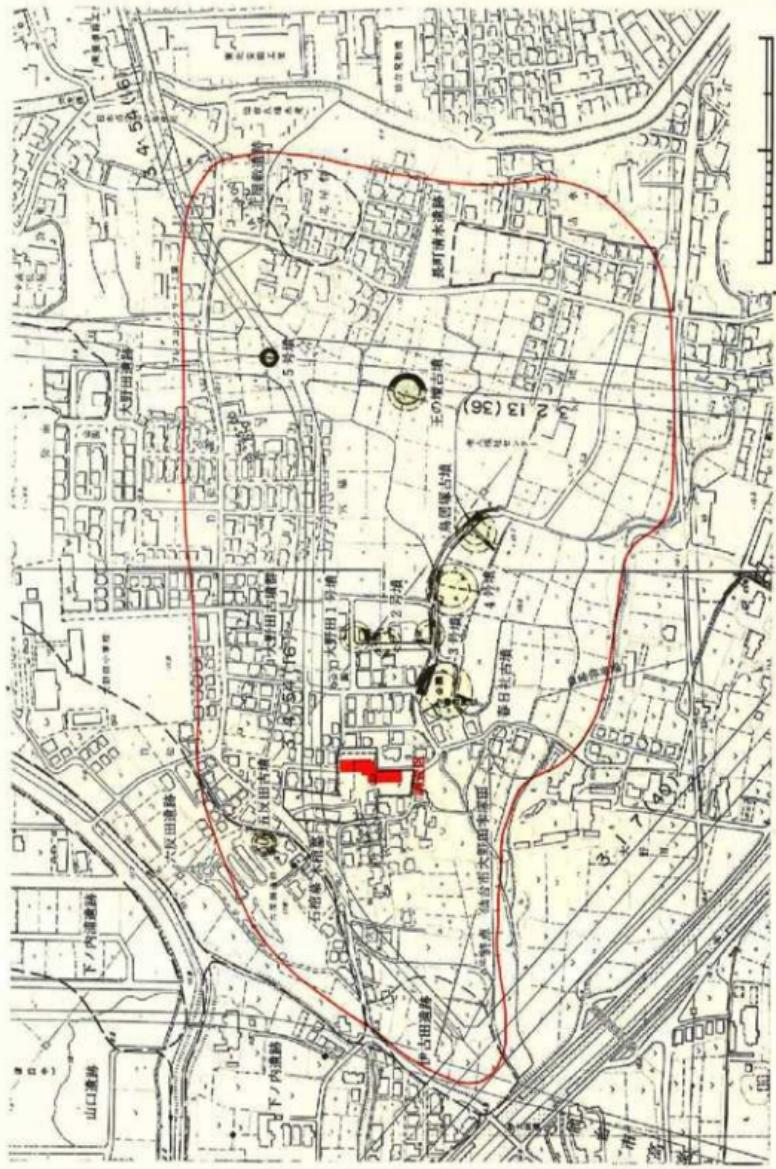
・調査主体：仙台市教育委員会

・調査担当：仙台市教育局社会教育部文化財課

　　試掘 田中剛和 本調査 主浜光朗

・調査参加者：小沼ちえ子、佐藤洋子（整理含む）赤川千広、阿部清太郎、宍戸豊子、遠藤いな子、小林国子、佐野たみえ、島貫美代、鈴木つや子、津島久子、三浦つよの、森 節子、森 金三  
佐藤 慶（整理のみ）

・調査協力：株式会社萩野工務店



第1図 大野田古墳群分布図 一赤線に囲まれた部分が古墳群の推定範囲

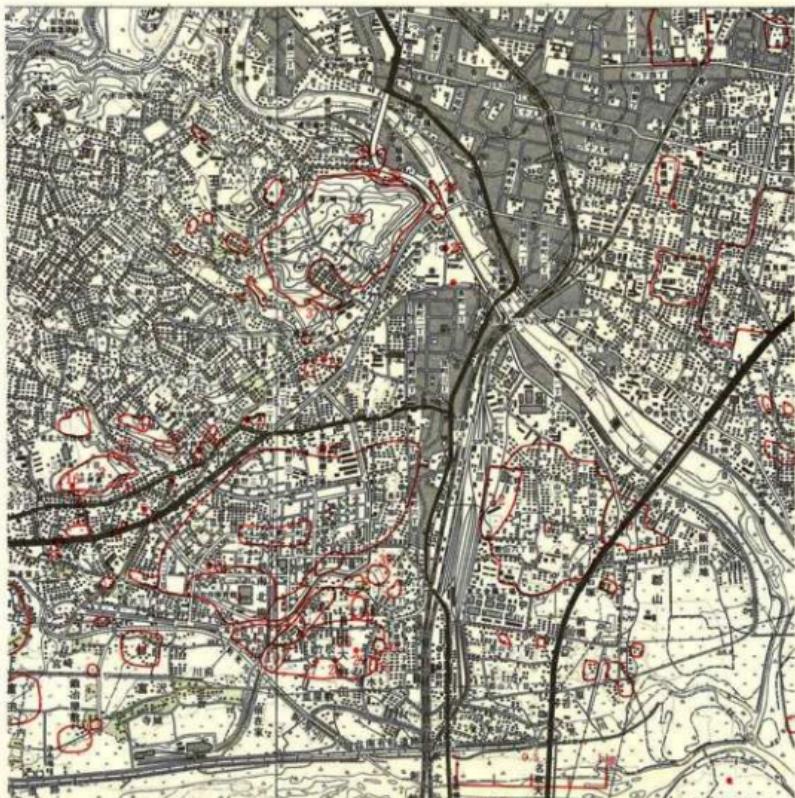
### III 遺跡の位置と環境

大野田古墳群は、東北本線長町駅より南南西およそ1.5～2kmの地点、仙台市太白区大野田地内に所在する。本遺跡の南方約0.8kmには名取川が、北方約3kmには名取川が望める所である。遺跡の範囲は東西約450m、南北約250mで面積は約110,000m<sup>2</sup>に及ぶものと推定される。

遺跡周辺の地形を概観すると、西側に南北に連なる奥羽山脈とその東麓から派生する陸前丘陵、さらに東方に宮城野海岸平野が広がっている。仙台市付近では陸前丘陵を広瀬川と名取川が東流しており、その河間段丘を青葉山丘陵（最高標高212m）、広瀬川以北を七北田丘陵（標高500m前後）、名取川以南を高館丘陵（標高200m前後）と呼んでいる。広瀬、名取両河川は中流域に下刻作用により4～5段の段丘地形を発達させている。それらは古期より青葉山段丘、台原段丘、上町段丘、中町段丘、下町段丘と呼称されている。また、両河川は丘陵を貫流した後、沖積作用により宮城野海岸平野を形成している。宮城野海岸平野は、地理的条件や成因、地質などからいくつに地形区分されており、仙台市南部の広瀬川と名取川の合流点付近では河間低地を郡山低地、広瀬川以北を霞ノ目低地、名取川以南を名取低地と呼称されている。

遺跡の所在する大野田地区は、宮城野海岸平野の中でも郡山低地に所属する。郡山低地は、北東縁と南縁を広瀬川と名取川によって画され、北西縁は長町一利府線による構造線で画された扇状地性の沖積面である。標高は約7～20mである。また、広瀬川と名取川両河川沿いに自然堤防が良好に発達している他、その中央部を南北に走る自然堤防もみられる。そして、自然堤防の背後には後背湿地が広がっている。大野田地区は、郡山低地南西部の自然堤防と後背湿地に立地し、北部に名取川の支流である笊川が曲流している。笊川は青葉山丘陵中の太白山付近に源を発する河川で、改修以前には流路を変しつつ頻繁に氾濫をくり返していたことが知られている。

大野田地区及びその周辺には数多くの遺跡が分布しており、近年の開発の進展に伴い、仙台市内でも発掘調査が比較的多く行なわれている地域である。これまでの調査により各時代の様相が次第に解明されてきている。旧石器時代では、富沢遺跡より後期旧石器時代の森林が検出され、樹木や石器の他に焚火跡や動物の糞などが検出されており、既にこの時期には生活の場となっていたことが明らかになっている。縄文時代では、下ノ内浦遺跡より早期前葉の遺構と遺物が検出され、中期中葉以降には自然堤防上に立地する六反田遺跡、下ノ内浦遺跡、下ノ内浦遺跡、伊古田遺跡等に居住域及び墓域等が形成される。この自然堤防上の地域は居住域として後世に連続している。弥生時代には広大な後背湿地に立地する富沢遺跡から水田跡が検出されている。また、西台畠遺跡では中期の壇棺墓、下ノ内浦遺跡から後期の墓壙や堅穴造構が検出されている。これらに伴う集落跡は不明であるが、後背湿地周辺の自然堤防上や段丘縁辺部に



No.	遺跡名	立地	種別	時代	No.	遺跡名	立地	種別	時代
1	富沢遺跡	後背湿地	包含地	旧石器	23	金岡八幡古墳	後背湿地	円墳	古墳
2	三神塚遺跡	段丘	集落跡	绳文	24	京澤寺古墳群	段丘	横穴墓	古墳末期~奈良
3	土手内遺跡	段丘	集落跡	绳文、弥生、古墳、平安	25	堀塚古墳	自然堤防	前方後円墳	古墳
4	山口通跡	段丘	集落跡	绳文、弥生、古墳、奈良、平安	26	大野田古墳群	自然堤防	円墳含む地	古墳
5	下ノ内通跡	自然堤防	集落跡	绳文、弥生、奈良、平安	27	春日社古墳	自然堤防	円墳	古墳
6	下ノ内通跡	自然堤防	包含地	绳文、弥生、奈良、平安	28	王の塚古墳	自然堤防	円墳	古墳
7	皇崎浜遺跡	段丘	集落跡	绳文、古墳、平安	29	鳥居塚古墳	自然堤防	円墳	古墳
8	大野田遺跡	段丘	集落跡	绳文、弥生、平安	30	富沢窓跡	段丘	窓跡	古墳、奈良、平安
9	六反田遺跡	自然堤防	集落跡	绳文、弥生、古墳、奈良、平安	31	金山窓跡	段丘	窓跡	古墳
10	伊古田遺跡	自然堤防	包含地	绳文、古墳、奈良、平安	32	土手内窓跡	段丘	窓跡	古墳、奈良
11	郡山通跡	段丘	自然堤防	绳文、弥生、古墳、奈良、平安	33	二ツ沢横穴群	丘	横穴墓	古墳
12	西台窓跡	段丘	包含地	绳文、弥生、古墳	34	愛宕山横穴群	丘	横穴墓	古墳、奈良
13	筆通跡	丘	包含地	弥生、古墳、平安	35	愛宕山横穴群	丘	横穴墓	古墳、奈良
14	筆通跡	丘	包含地	弥生、奈良、平安	36	土手内横穴群	丘	横穴墓	古墳
15	長町清水通跡	自然堤防	古墳	古墳	37	茂ヶ崎横穴群	丘	横穴墓	古墳
16	三神塚古墳群	段丘	円墳	古墳	38	西台窓跡	段丘	窓跡	奈良、平安
17	金洗沢古墳	段丘	古墳	古墳	39	元佐置遺跡	自然堤防	包含地	奈良、平安
18	美町吉塚	段丘	前方後円墳	古墳	40	砂押屋敷遺跡	段丘	包含地	奈良、平安
19	教塚	古墳	後背湿地	古墳	41	富沢窓跡	段丘	窓跡	中世
20	砂押屋敷	段丘	古墳	古墳	42	茂ヶ崎城跡	丘	横城跡	中世、近世
21	二塚古墳	段丘	前方後円墳	古墳	43	北目城跡	自然堤防	城跡	中世、近世
22	一塚古墳	段丘	円墳	古墳	44	北星敷遺跡	丘	包含地	平安、中世、近世

第2図 周辺の遺跡・地名表

存在すると考えられている。古墳時代では、伊古田遺跡で前期の住居跡が検出され、富沢遺跡では中期の水田跡、「ドノ内遺跡」、泉崎浦遺跡で住居跡が検出されている。古墳は中期後半から後期のものが多く存在している。兜塚古墳、砂押古墳、金洗沢古墳などが長町一利府線に沿って並んでおり、既に削平された一塚古墳、二塚古墳、裏町古墳も含めた6基が並んで存在していた。また三神峯古墳群、教塚古墳、金岡八幡古墳などがある。その他にも埴輪の採集される遺跡があり、削平された古墳はさらに多数存在していたものと考えられる。これらの古墳は散在するものがほとんどであり群集しているものは大野田古墳群の他にはみられない。また、大野田古墳群については、1976年から行われた六反田遺跡の発掘調査を契機として、五反田古墳、五反田石棺墓、五反田木棺墓が検出され、その東に春日社古墳、鳥居塚古墳、火野田1~4号墳が近接して群在し、さらに王の塚古墳、大野田5号墳がある。<sup>(註1)</sup> その範囲については、西に近接する伊古田遺跡、東に接する長町清水遺跡からも埴輪が採集されることを考えるとそれぞれの遺跡間全体に広がりをもつものと考えられる。この時期の窓跡には埴輪窓の富沢窓跡と須恵器窓の金山窓跡があり、後期から末期にかけての須恵器窓の土手内窓跡がある。古墳時代末期から奈良時代にかけては横穴墓の造営が盛んに行なわれるようになってくる。青葉山丘陵には大年寺横穴群、宗禅寺横穴群、茂ヶ崎横穴群、二ッ沢横穴群、土手内横穴群がある。一方、名取川と広瀬川の合流点の西側には、多賀城以前の官衙跡である郡山遺跡とその付属寺院である郡山焼寺跡がある。奈良、平安時代には山口遺跡で集落跡と水田跡が、宮沢遺跡で水田跡、下ノ内遺跡、六反田遺跡、下ノ内洞遺跡等で集落跡が検出されている。また富沢遺跡では中・近世まで水田が營まれている。中世から近世には自然堤防上や丘陵上に館が作られるようになる。以上のように大野田地区周辺には、II石器時代から現代に至るまで、連綿と人間の生活の痕跡が残されている。

註1) 大野田5号墳は都市計画道路「川内一柳生線」関連遺跡の発掘調査によって確認された古墳で、現在調査は継続中である。円筒埴輪及び朝顔形埴輪が出土している。王の塚古墳については東半部を調査し、円筒埴輪が出土している。

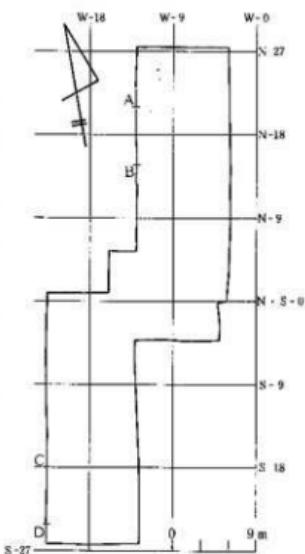
#### IV 調査の方法と経過

開発申請地は、大野田古墳群の從前よりの推定範囲の西端の境界線に接して位置しており、試掘調査の結果、全面に盛土が30~50cmあり地表から60cm~80cmで遺構が検出され、さらに下層にも遺構が確認された。また当該地は萩野工務店の資材置場として利用されており、所々に搅乱が認められた。

本調査では、建築物の中央部東隅を原点として、建築物の東側ラインを基準として3m×3mのグリッドを設定し、このラインより北を北区、南を南区とした。調査対象面積は643m<sup>2</sup>であ

る。試掘調査において、第2トレンチは資材置場をさけて設定したために、建築部分よりやや両側にずれていた。このため調査区の北区を試掘第2トレンチをとりこむような形に約593m<sup>2</sup>の範囲に設定した。試掘結果より、重機で盛土及び基本層5層直上まで堆土し、人力によって遺構確認作業を行なった。

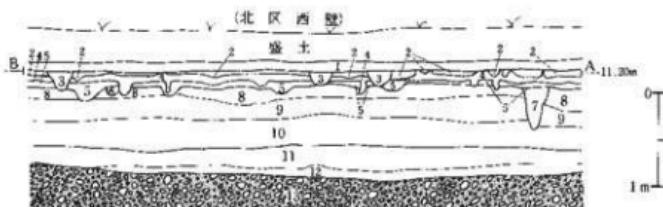
検出された遺構は、5層上面で溝跡、小溝状遺構群が検出された。6層上面で竪穴遺構、土坑、溝跡、小溝状遺構群、ピットが検出された。6層上部以下では、遺構、遺物は検出されなかった。調査中実測図は縮尺1/20の平面図、土層断面図を作成した。遺構、遺物が検出されなかつた6層上部以下については南、北2ヶ所の深掘り区を設定して標層上面まで掘り下げた。調査は12月26日に終了し、12月27日には調査区の埋め戻しまで終了した。



第3図 グリッド配置図

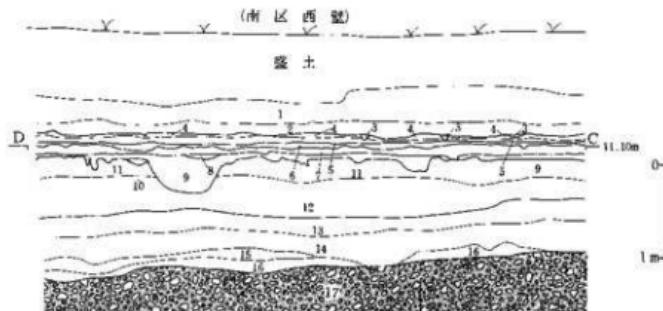
## V 基本層位

基本層位は盛土以前の水田あるいは畑耕作土のI層よりVII層までの大別8層確認された。これらはさらに14層に細分される。I層は盛土以前の耕作土で、南区では上部が畑、下部が水田耕作土、北区は水田耕作土である。I層下部から下層の上部にかけて酸化鉄の集積が顕著にみられる。II層は南側では確認されるが、北側では削平のためかほとんどみられない。III層は灰黄褐色の粘土質シルト～シルト質粘土層であるが、調査区中央部付近では黒褐色を呈する部分もある。断面からはIII層上面から掘り込まれた落ち込みが観察される部分もみられた。IV層は黄褐色～にぶい黄褐色の粘土質シルト層で、北区では上部で部分的に灰白色火山灰が斑に含まれる。V層は暗褐色のシルト～粘土質シルト層で上部にマンガンを層状に含んでおり上面は堅くしまっている。VI層は3層に細分される。褐色～にぶい黄褐色シルト層で南区の南部、北区の北半部すなわち小溝状遺構群の分布範囲では上部が搅拌されて層が乱れている。VII層は4層に細分される褐色系のシルト質砂～砂層で、下層にいくに従って砂粒が大きくなる。VIII層は砂疊層である。今回の調査では本遺跡の北側及び西側に隣接する六反田遺跡、伊古田遺跡で確認されている縄文時代の遺物包含層、遺構面は検出されなかった。



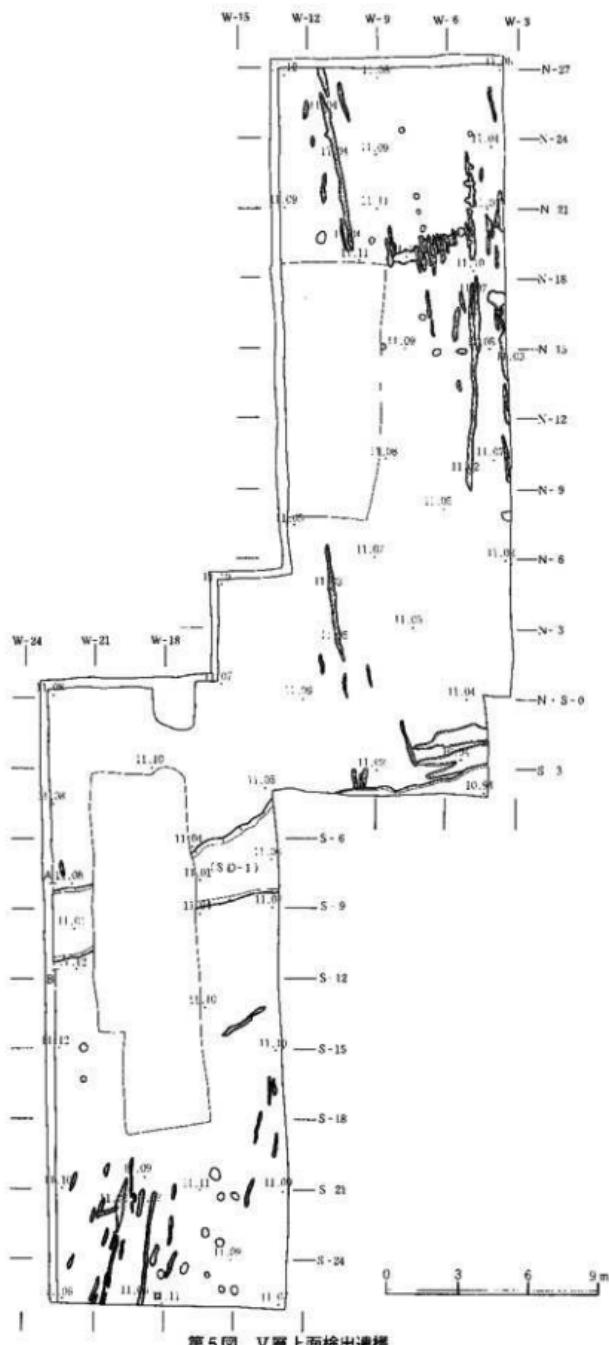
北区西壁セクション土層記表

層位	層号	土色	土性	特徴
I	1	灰オリーブ 7.5YR 5%	粘土質シルト	グレイ。田水田耕作土。下部に酸化鉄多く含む。
II	2	灰 黄 暗 10YR 5%	粘土質シルト	酸化鉄、マンガン含む。
III	3	灰 黄 5YR 5%	シルト	酸化鉄、マンガン含む。直線上より剥り落された遺構の堆積土。
IV	4	黄 暗 2.5YR 5%	粘土質シルト	酸化鉄、マンガン、炭化物含む。
V	5	暗 10YR 5%	シルト	炭化物含む。上面にマンガンを塊状に含む。
	6	褐 10YR 5%	シルト	2.5YR 7.5YR 黄 10YR 5% を含む。
	7	褐 10YR 5%	シルト質粘土	10YR 5% 黄鐵鉄石を含む。
	8	暗 10YR 5%	シルト	粘性高い。上部が攪乱されている。
	9	褐 10YR 5%	砂質シルト	2.5YR 黄鐵鉄石、マンガンを荷降り状に含む。粘性弱い。
	10	褐 10YR 5%	シルト質 砂	2.5YR 黄鐵鉄石を荷降り状に含む。マンガンを含まない。
	11	暗 10YR 5%	シルト	2.5YR 黄鐵鉄石を荷降り状に含む。炭素の炭化物含む。
	12	黄 暗 2.5YR 5%	砂	粘性がある。種数cm~数cmの小礫含む。
電	13	褐 10YR 5%	砂 ~ 砂砾土	



南区西壁セクション土層記表

層位	層号	土色	土性	特徴
I	1	灰オリーブ 5YR 5%	シルト	グレイ。旧耕作土。
2	黄 暗 2.5YR 5%	シルト	田耕作土。	
3	黄 暗 2.5YR 5%	シルト		
	4	暗 10YR 5%	粘土質シルト	マンガン、酸化鉄、炭化物含む。
	5	暗 10YR 5%	シルト	マンガン、酸化鉄含む。
	6	黄 暗 10YR 5%	シルト	マンガン、酸化鉄含む。
	7	暗 10YR 5%	シルト	マンガン含む。
	8	暗 10YR 5%	粘土質シルト	マンガン含む。
	9	暗 10YR 5%	シルト	上面にマンガンを塊状に含む。
	10	暗 10YR 5%	粘土質シルト	
	11	褐 10YR 5%	シルト	粘性高い。マンガン含む。
	12	褐 10YR 5%	シルト質粘土	2.5YR 黄鐵鉄石を荷降り後に含む。マンガンを含まない。
	13	褐 10YR 5%	砂	2.5YR 黄鐵鉄石を荷降り後に含む。微量の炭化物、マンガンを含む。
	14	褐 10YR 5%	シルト質 砂	2.5YR 黄鐵鉄石を含む。
	15	褐 10YR 5%	砂	種数cmの砂粒を含む。
	16	褐 10YR 5%	砂	種数cm~数cmの小礫含む。
電	17	暗 10YR 5%	砂	砂砾層



## VI 検出遺構と出土遺物

今回の調査で検出された遺構は、V層上面で、溝跡、小溝状遺構群があり、VI層上面で溝跡、小溝状遺構群、竪穴遺構、土坑、ピットが検出されている。

遺物は、整理用平箱（テンバコ32）にして3箱程の出土量である。弥生土器、土師器、埴輪、石製品などがある。

### (1) V層上面検出遺構と出土遺物

V層上面では、溝跡1条、小溝状遺構群が検出されている。

#### SD-1溝跡

南北北寄りに位置し、調査区を斜めに横切るように延びている。遺構は調査区外へ延びており、今回検出されたのはその一部であると考えられる。調査区外での方向はおよそE-10°-Nである。上幅は2.3m~4.4mである。東側が広くなっている。全体に浅く、断面形は皿状を呈している。深さは確認面から底面まで10cm前後である。底面はほぼ平坦で、底面レベルにほとんど変化はみられない。堆積土は3層に分けられる。2層下部には砂粒が認められる。自然堆積であると思われる。遺物は、堆積土中より土師器片、剝片が出土している。土師器は全て摩小片であり詳細は不明である。



第6図 SD-1 溝跡断面

#### 小溝状遺構群

主に調査区内の南及び北寄りで検出されている。長さは0.5m~9mとかなり開きがみられるが、幅は10cm~40cm、深さは2cm~10cmの範囲におさまる。断面形は浅い「U」字状あるいは逆台形状を呈している。方向は南北方向のものが大部分であるが中には東西方向のものもみられる。小溝状遺構同士で重複しているものもみられるが、大きな時期差は考えられない。堆積土は全て单層であり、10YR4/2あるいは7.5YR4/3のシルト質粘土である。重複しているもので新しいものは10YR4/3のシルト質粘土である。遺物は土師器片が出土しているが全て摩小片であり、詳細は不明である。

### 遺構外出土遺物

V層中出土遺物の中から、特徴的なものを取り上げて掲載する。

7図1は弥生土器片である。体部破片で、地文に縄文(LR横位回転)が施され、その上に3条以上の沈線文と沈線文間にミガキが施されている。内面は横位のナデ調整が施されている。破片が小さく文様構成も不明であり、詳細な時期、型式は不明である。

7図2、3は円筒埴輪の小破片である。3はV層面検出時に出土したものであるがここで取り上げる。2は凸帶部分で、外面調整はタテハケメのみが観察される。凸帶は断面形が台形で上幅0.8cm前後、下幅2.0cm前後、高さ0.6cm~0.8cmで上、側、下面とも強くナデつけられている。内面は縱方向のナデが施されているが凸帶内面には横方向のナデが施されている。3も凸帶部分であるが外、内面ともに磨滅が著しく調整及び凸帶の形態についても不明である。凸帶の下幅1.8cm前後、高さは0.7cm前後で上幅は不明である。



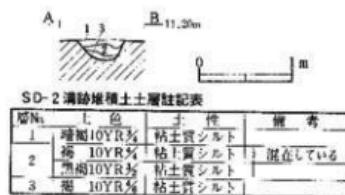
7図 遺構外出土遺物

### (2) VI層上面検出遺構と出土遺物

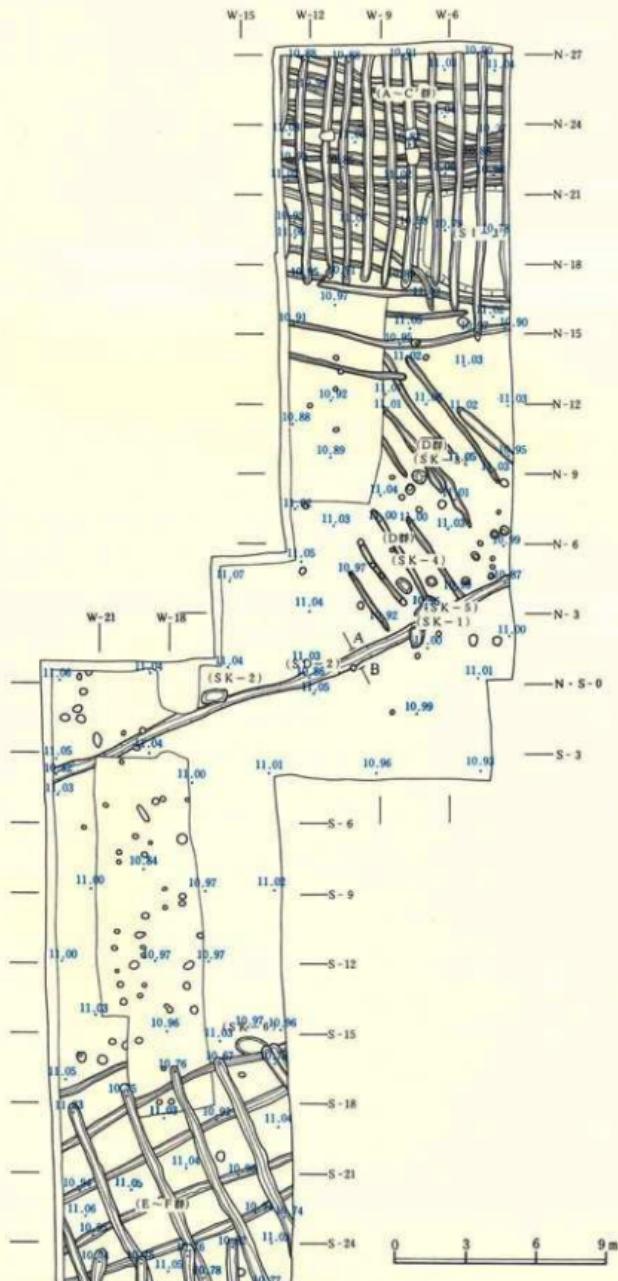
VI層上面では、溝跡1条、竪穴遺構1基、土坑6基、小溝状遺構群8群等が検出されている。

#### SD-2溝跡

調査区中央に位置し、調査区を斜めに横切るように延びている。遺構は調査区外へ延びており今回検出されたのはその一部であると考えられる。SK-1、SK-2、SK-5の各土坑、小溝状遺構群D群、ピットと重複関係にありSK-1、SK-2、ピットに切られ、その他の遺構を切っている。調査区内での方向は、およそE-15°-Nである。上幅は35cm~60cm、底面幅は15cm~35cmである。断面形は逆台形を呈しているが「U」字状の部分もみられる。深さは確認面から底面まで25cm前後である。底面はほぼ平坦であるが、底面レベルは一定せず、比高差10cm程度で大きくなっている。堆積土は3層に分けられる。自然堆積であると思われる。



8図 SD-2 溝跡断面

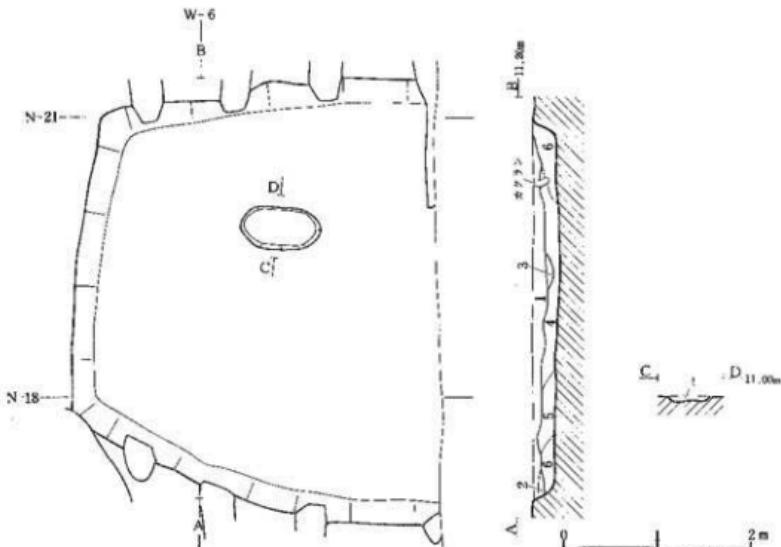


第9図 VI層上面検出构造

遺物は、堆積土中より土器器片が出土している。全て小破片であり詳明は不明である。

### SI-1 竪穴遺構

調査北東部W-3～W-7、N-16～N-21に位置している。遺構は東側の調査区外へ延びており、今回検出されたのはその一部であると考えられる。小溝状遺構群A群と重複関係にあり、小溝状遺構群A群に切られている。また、位置的に同B群、C群、C'群との重複関係も考えられるが、その関係については確認できなかった。全体の平面形、規模は明らかではないが、調査区内では、南北4.75m×東西3.8m以上の隅丸の方形を基調としており、やや南側が膨らんでいる。西壁の方向はN-10°～Eである。堆積土は3層に大別される。壁はVI層から成り、底面から急角度で立ち上がるが、西壁は傾斜が緩やかになっている部分がある。底面は平坦で中央部付近はやや堅くしまっているが、壁周辺は柔らかい。底面の中央部やや北寄りに85cm×45cmの楕円形で、深さ5cmの掘り込みがあり、底面に焼土塊が検出された。これは炉の可能性がある。その他に底面に施設は認められず、ピット、周溝も検出されなかった。遺物は、堆積土、底面から土器及び礫が出土した。



SI-1 竪穴遺構堆積土層計測表

層位	色	土 性	層 名
1	褐色 10YR 5/4	粘土質シルト	
2	黒褐色 10YR 2/2	粘土質シルト	
3	にぶい黄褐色 10YR 5/6	シルト	
4	褐色 10YR 5/4	シルト	炭化物含む
5	褐 10YR 5/4	粘土質シルト	炭化物含む
6	褐 2.5YR 5/4	粘土質シルト	炭化物含む

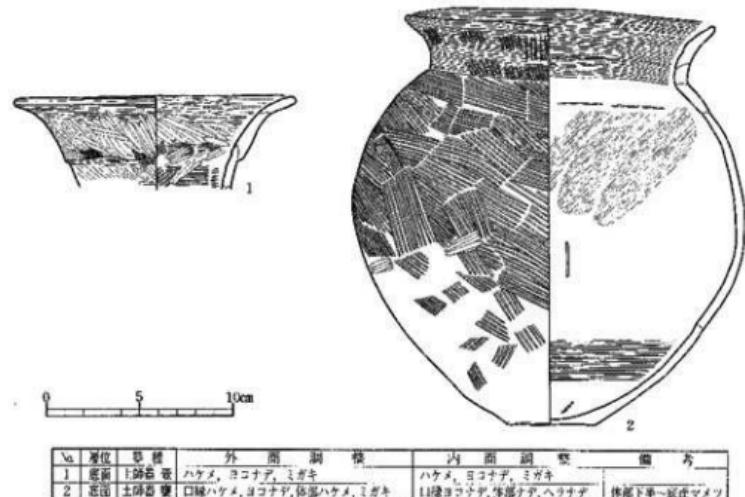
S I - 1 底面掘り込み堆積土土層計測表

層名	土 色	上 性	層 名
1	暗7.5YR 5/6	シルト質粘土	地上被多量、炭化物含む

第10図 S I - 1 竪穴遺構

(出土遺物)

土器片は全て土師器である。摩小片が多く図示できた資料は2点のみである(第11図1、2)。1は二重口縁の壺の口縁部である。頸部以下は欠けている。下部はやや内窪みに外傾して立ち上がり、上部は大きく外反している。中央部外面には段が認められる。器面調整は、外面上部にヨコナデ、ハケメ、ヘラミガキ、下部にはハケメ、ヘラミガキが施されている。内面は上部にヘラミガキ、下部にハケメ、ヘラミガキが施されている。2は、壺である。小さな平底で体部下半で変化しながら丸味をもって立ち上がり、体部中位に最大径をもつ。口縁部は外反気味に外傾している。内面の体部と口縁部の境は鋭角的に屈曲している。器面調整は、外面で体部にハケメが施されるが、一部にヘラミガキがみられる。口縁部はハケメ、ヨコナデが施されている。内面は体部にナデ、ヘラナデ、口縁部にヨコナデが施されている。



第11図 S 1-1 穫穴遺構出土土器

**SK-1 土坑**  
北区南東寄りのW-7、  
N-2付近に位置している。  
SD-2溝と複雑関係にあ  
り、本遺構が切っている。平



第12図 SK-1 土坑

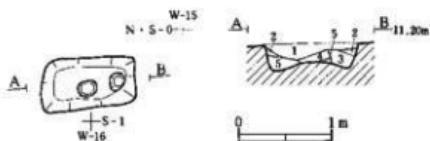
面形は、長軸0.9m、短軸0.6mの不整な橢円形を呈している。壁は10cm~17cmの高さがあり、北側の壁が高くなっている。底面から急角度で立ち上がる。底面はほぼ平坦である。堆積土は3層に分けられる。遺物は堆積土から土師器の小破片が出土しているが図示資料はない。

#### SK-2 土坑

南区北寄りのW-16、S-0付近に位置している。SD-2溝と重複関係にあり、本遺構が切っている。

平面形は、長軸1.05m、短軸0.55mの隅丸の長方形を呈している。壁は26cmの高さがあり、底面から急角度で立ち上がる。底面はほぼ平坦である。

堆積土は3層に大別される。底面にピットが2個検出された。遺物は出土しなかった。



SK-2 土坑堆積土土層註記表

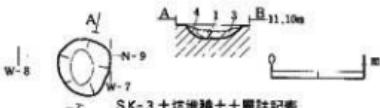
層位	層No	土色	土性	備考
1	1	暗灰青 2.5YR 5/2	シルト	酸化鉄含む
	2	灰オリーブ 7.5YR 5/2	粘土質シルト	酸化鉄含む
2	3	灰黄褐色 10YR 5/6	粘土質シルト	
	4	オリーブ褐 2.5YR 5/6	粘土質シルト	粘性強い
3	5	オリーブ褐 2.5YR 5/6	粘土質シルト	

第13図 SK-2 土坑

#### SK-3 土坑

北区中央やや南寄りのW-7、N-9付近に位置している。他の遺構との重複関係はみられない。平面形は、径約0.6mの不

整円形を呈している。壁は15cmの高さがあり、底面から緩やかに立ち上がる。底面は平坦である。堆積土は2層に大別される。遺物は出土しなかった。



SK-3 土坑堆積土土層註記表

層位	層No	土色	土性	備考
1	1	褐色 10YR 5/6	シルト	
	2	に赤い斑駁 10YR 5/6	シルト	
2	3	オリーブ褐 2.5YR 5/6	粘土質シルト	
	4	褐色 10YR 5/6	粘土質シルト	

第14図 SK-3 土坑

#### SK-4 土坑

北区南寄りのW-8、N-4付近に位置している。他の遺構との重複関係はみられない。平面形は長軸0.75m、短軸0.45mの楕円形を呈している。壁は21cmの高さがあり、底面から緩やかに立ち上がる。底面は平坦である。堆積土は2層に分けられる。遺物は出土しなかった。



SK-4 土坑堆積土土層註記表

層No	上色	下性	備考
1	暗褐色 10YR 5/6	粘土質シルト	
2	暗褐色 10YR 5/6	粘土質シルト	

第15図 SK-4 土坑

### SK-5 土坑

北区南寄りのW-7、N-3付近に位置している。SD-2溝、小溝状遺構群D群と重複関係にあり、SD-2溝に切られ、小溝状遺構群D群を切る。平面形は長軸1.1m、短軸は残存長0.6mの隅丸長方形を基調とした平面形を呈している。壁は5cmの高さがあり、底面から急角度で立ち上がる。底面は平坦であるが、ピットが1個検出された。堆積土は3層に分けられる。遺物は底面から砾石器が1点出土した。



(出土遺物)

第16図1は砾

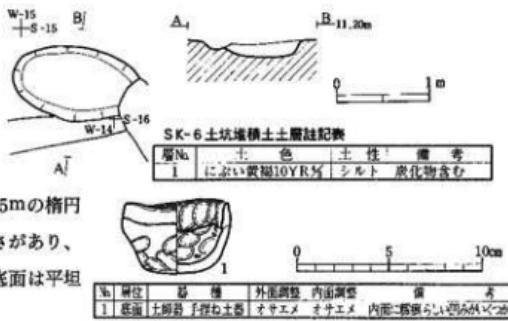
石器である。片

面は剥落が著し

いが、両面に磨面が認められる。また一方の端部に打ち欠きによる抉りがみられ、反対側が僅かに凹んでいる。このことから、石鍤として用いられたものである可能性も考えられる。

### SK-6 土坑

南区東南寄りのW-14、S-15付近に位置している。小溝状遺構群E群、F群と重複関係にあり、両者に切られている。平面形は、長軸1.4m以上、短軸0.85mの楕円形を呈している。壁は16cmの高さがあり、底面から緩やかに立ち上がる。底面は平坦である。堆積土は単層である。



第17図 SK-6 土坑・出土土器

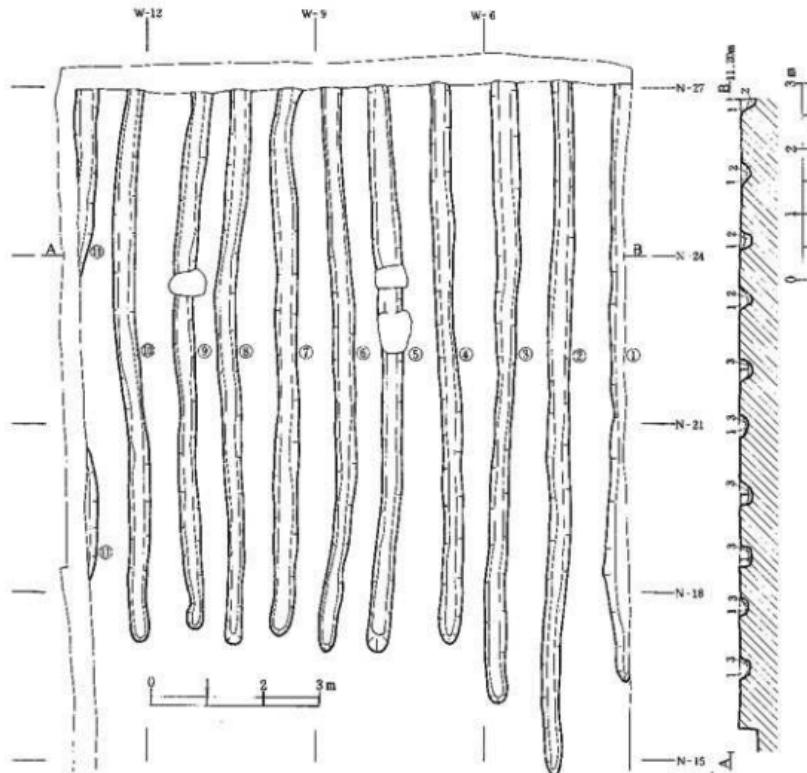
遺物は堆積土より土師器が出土した。図示遺物は手捏ね土器 1 点のみであり(第17図 1)、その他は小破片である。

#### 小溝状造構群

小溝状造構群は、北区全般と南区南部で検出され、方向や重複関係から 1 つの単位として判別できるものが A 群～F 群まで 8 群確認された。

#### 小溝状造構群 A 群

北区北半部の N-14 以北に位置している。調査区内で 11 条検出したが、東、西、北側の調査区外へ広がっており、全体の範囲、規模は不明である。小溝状造構群 B 群、C 群、C' 群、S1-1 壁穴造構と重複関係にあり、いずれをも切っている。上端幅は 25cm～45cm、深さは 13cm～24



第18図 小溝状造構群 A 群

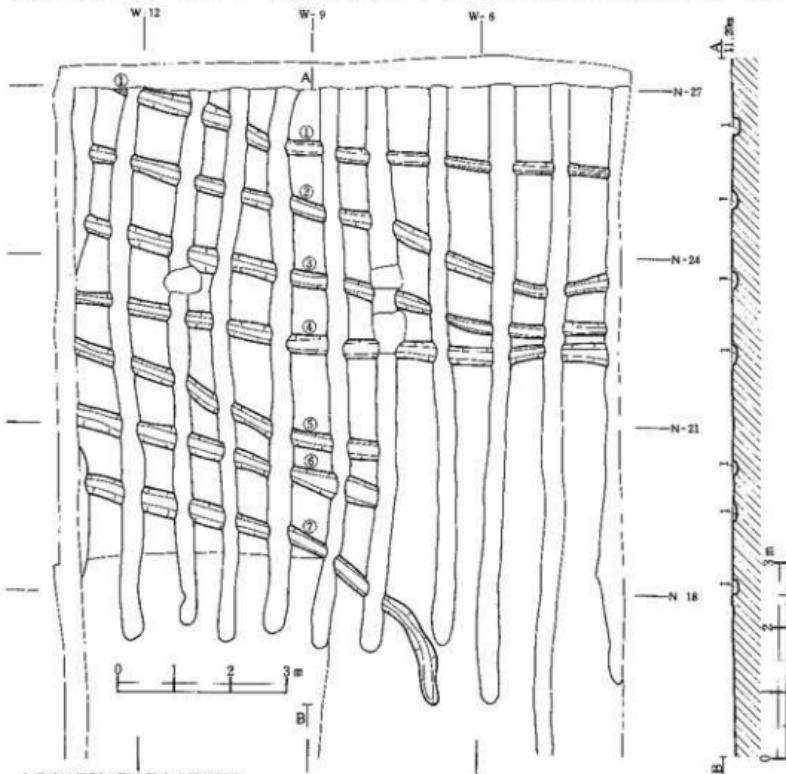
小溝状造構群 A 群堆積土土層記表

No.	土色	土性	層	寄
1	暗緑7.5YR 3/4	粘土質シルト	マンガン粒、炭化物包含	
2	暗緑10YR 3/4	シルト		
3	緑 10YR 3/4	粘土質シルト	混生している	
	暗緑10YR 3/4	シルト	炭化物粒混在	

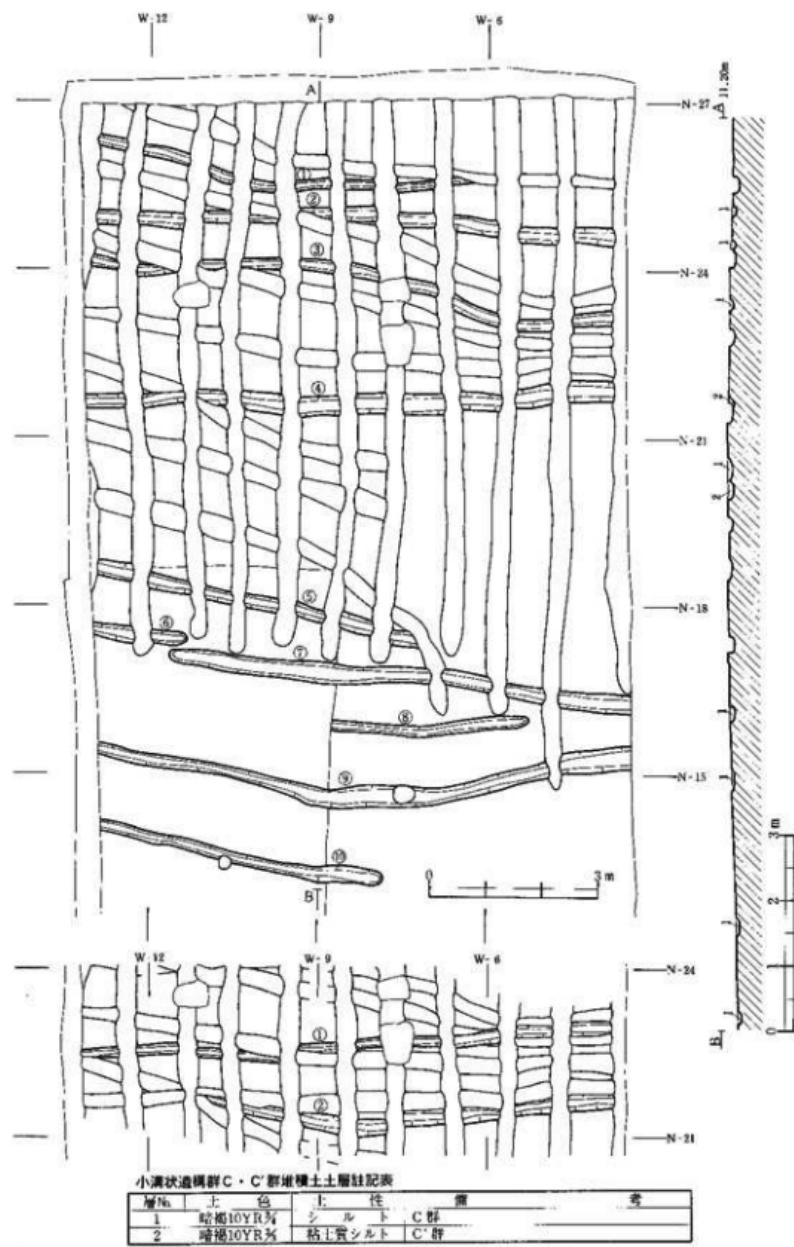
cmである。溝の間隔は平均約60cmである。方向はN-10°-Eである。

#### 小溝状造構群B群

北区北半部のN-16以北に位置している。調査区内では7条検出したが、東、西、北側の調査区外へ広がっており、全体の範囲、規模は不明である。小溝状造構群A群、C群、C'群と重複関係にあり、A群に切られ他を切っている。また、位置的にS I - 1堅穴造構との重複関係を考えられるが、その関係については確認できなかった。上端幅は20cm~45cm、深さは6cm~15cmである。溝の間隔は40cm~1.4mと一定せずまちまちである。方向は概ねE-10°~36°-Sの範囲に入るが、W-6~W-9付近で大きく方向を変えているものがある。南端の⑦はW-9付近から大きく南へ弯曲している。また、⑤・⑥について、A群の⑤以東では検出できなかった。



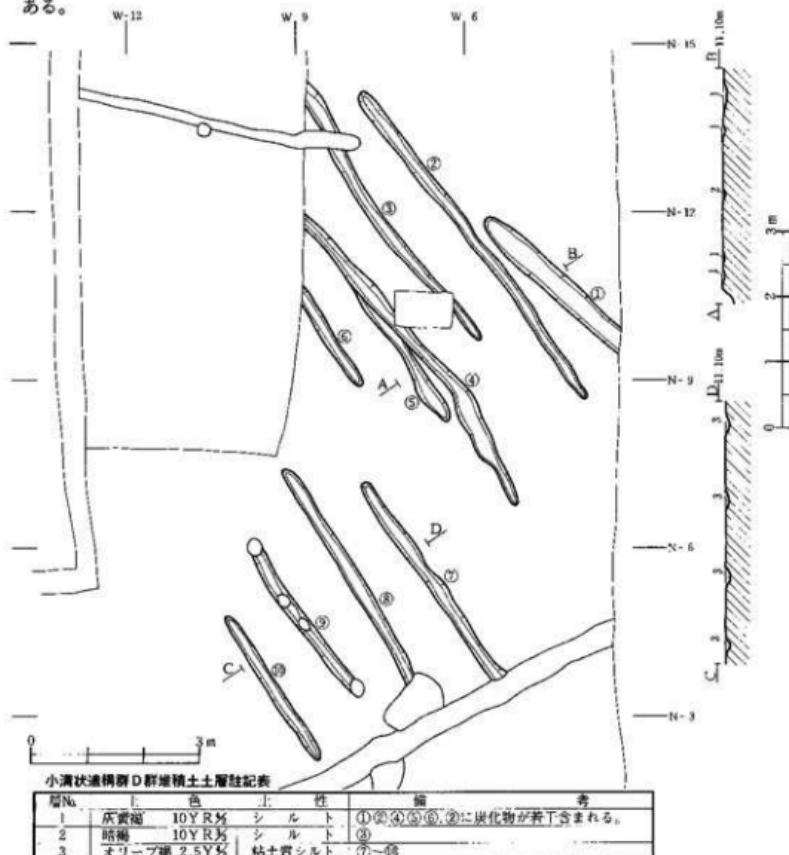
第19回 小溝状造構群B群



第20図 小溝状遺構群C群(上段)・C'群(下段)

### 小溝状遺構群 C 群、C' 群

北区北半部のN-13以上に位置している。C群は10条、C'群は2条検出した。位置関係、重複関係から本来C群はさらに2群に分けられる可能性があり、C'群はC群に切られており他の名称を付けて分けるべきところであるが、方向性が同一であるという点、B群に切られている点から類似性が認められたため同群として扱った。それぞれ東・西側の調査区外へ広がっており、全体の範囲、規模は不明である。C群、C'群はA群、B群、D群と重複関係にあり、A群、B群に切られ、D群を切っている。上端幅はC群で18cm~40cm、C'群が15cm~23cm、深さは、それぞれ5cm~7cm、4cm~9cmである。溝の間は北側のC群で40cm~2m、南側で40cm~1.2m、C'群で1m前後であるが、屈曲が大きいため一定ではない。方向は概ねE-10°~15°-Sである。



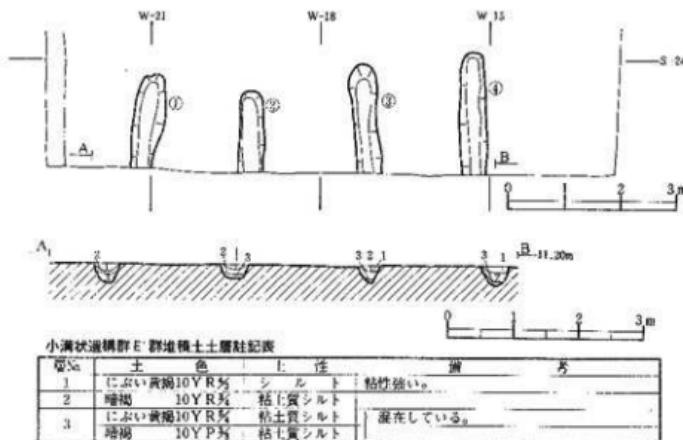
第21図 小溝状遺構群D群

### 小溝状遺構群 D 群

北区中央部より南半のN-2～N-14に位置している。調査区内で10条検出したが、東側の調査区外へ広がっており、全体の範囲、規模は不明である。小溝状遺構群C群、SD-2溝跡、SK-5土坑と重複関係にあり、全てに切られている。群の中で④と⑤が重複している。上端幅は15cm～45cm、深さは4cm～8cmと遺存状況はよくない。溝の間隔は概ね70cm～80cmで、ほぼ一定である。方向はN-20°～W前後である。

### 小溝状遺構群 E'群

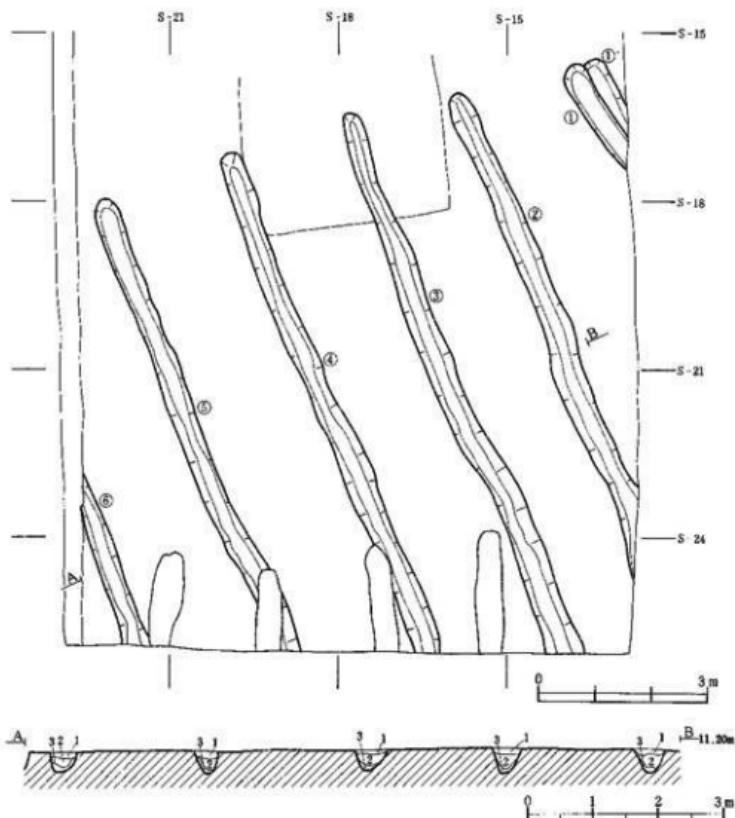
南区南端部分S-24以南に位置している。調査区内で4条検出したが、南、西側の調査区外に広がっており、東側に広がる可能性もあることから、全体の範囲、規模は不明である。小溝状遺構群E群、F群と重複関係にあり、両者を切っている。上端幅は35cm～45cm、深さは23cm～30cmである。溝の間隔は1.4m程度で、ほぼ一定である。



第22図 小溝状遺構群 E' 群

### 小溝状遺構群 E 群

南区中央部より南半部のS-15以南に位置している。調査区内で8条検出した。東、南、西側の調査区外へ広がっており、全体の範囲、規模は不明である。SK-6土坑、小溝状遺構群E'群、F群と重複関係にあり、E'群に切られ、SK-6土坑、F群を切っている。上端幅は40cm～50cm、深さ30cm～40cmとほぼ一定である。溝の間隔は1.5m～2.1mあり、いずれも8群の小溝状遺構群中で最も大きい。方向はN-10°～Wである。



小溝状遺構群E群堆積土層註記表

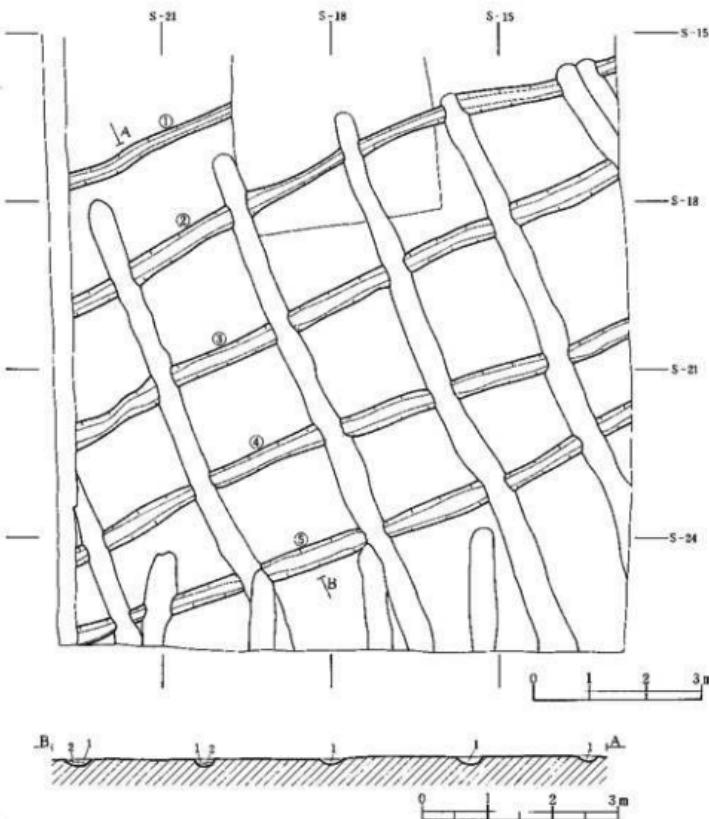
層No.	土色	性状	備考
1	暗褐色10YR 5/2 黒褐色10YR 5/1	シルト	③に10YR 5/1の部分有。
2	褐色10YR 5/4 褐10YR 5/6	シルト	混在している。④では10YR 5/4シルトのみ。
3	褐色10YR 5/6	シルト	①, ②では底面付近に砂が見られる部分有。

第23図 小溝状遺構群E群

#### 小溝状遺構群F群

南区中央部より南半のS-15以南に位置している。調査区内で5条検出した。東、南、西側の調査区外へ広がっており、全体の範囲、規模は不明である。SK-6土坑、小溝状遺構群E群、E'群と重複関係にあり、SK-6土坑を除いて他の遺構全てに切られている。上端幅は20

cm～40cm、深さは8cm～13cmである。溝の間隔は1.0m～2.1mである。方向はE-15°-Nである。



小溝状遺構群F群堆積土土層註記表

層No.	土色	土性	備 考
1	暗褐色 10YR 4/2	シルト	—
2	褐色 10YR 4/4	粘土質シルト	—

第24図 小溝状遺構群F群

小溝状遺構群では、遺物は、B群及びC'群を除く各群から出土している。出土遺物は全て土器器片である。全体を把えられる程の破片はないが、全て成形に際してロクロを使用しないも

ので、外面には細かいハケメ調整、内面にはナデ、ヘラナデ調整のものが多い。内面に黒色処理が施されたものは全くみられない。

#### ピット群

調査区の北部を除いてほぼ全域にピットが検出されたが、旧耕作土から掘り込まれたものが多く、VI層に伴なわないものや、遺構とは認められないものがかなりの数に上ると思われる。特に調査区の中央部に多く検出されているが、柱痕跡が確認されるものが少なく、規模、形態に規格性はみられず、柱穴と考えられるピットは少数であり、建物跡の存在については不明である。ピット内からの遺物の出土はない。

### VII ま と め

大野田古墳群は名取川の形成した自然堤防上に立地している。今回の調査区は古墳群の西寄りに位置しているが古墳は検出されなかった。

V層上面で検出された遺構には溝跡、小溝状遺構群がある。いずれも遺存状況が悪く詳細は不明である。

VI層上面では、溝跡、竪穴遺構、土坑、小溝状遺構群などが検出されている。溝跡は調査区を東西に横断しており、何らかの区画施設の一部とも考えられる。竪穴遺構は、底面に焼土塊がつまた掘り込みがみられるが、周溝やピットなどの施設が検出されず、竪穴住居跡とは考え難い状況である。小溝状遺構群は8群みられるが、全体の規模が明らかなるものはほとんどみられない。調査区北側（A～C'群）、中央やや北寄り（D群）、南側（E～F群）にまとまりがみられる。D群は最も遺存状況が悪く、かなり削平を受けているものと思われる。北側のものは南北方向のもの（A群）と東西方向のもの（B～C'群）があり、竪穴遺構周辺に分布する。最も新しいA群が竪穴遺構と重複関係にあり竪穴遺構より新しいことが確認されているが、その他のものは重複関係が確認されず、また、B群、C群のように竪穴遺構を避けていると考えられるものもみられることから、B群、C群が営まれた時期には竪穴遺構が存在していたかあるいは埋没しきらずに窪地状になっていたという可能性がある。また南側のものは北側のものと方向が異なるものがある（E群、F群）。E群の堆積土の一部をサンプリングし水洗したところ植物種子が検出された。これらの小溝状遺構群は畑あるいは畠跡と考えられているものであるが、耕作方法や栽培された作物など不明な点も多く、具体的な畑を復元するには今後の資料の蓄積からの検討が必要であると思われる。

出土遺物は、V層出土遺物には土師器片の他埴輪片、弥生土器片があるが確実にV層に帰属

するものはみられない。VI層出土遺物には土師器及び石製品がある。土師器では、全体を把握できるものは、軽穴造構出土の壺1点のみであるが、体部中位に最大径をもつ丸味の強い器形で、ロクロを使用せず、口縁部内、外面にヨコナデ、体部外面にハケメ、体部内面には、ナデやヘラナデが施されている。また、二重口縁の壺が共伴している。以上のような特徴をもつ土師器の壺は色麻町色麻古墳群<sup>註3)</sup>、藏王町大橋遺跡などに類例がみられ、塙釜式とされている。その他のものについてもロクロを使用しているものはないことから、ほぼ同時期のものと考えられる。石製品は疎石器で、両面が磨面となっている。抉りと凹みが対になっており石錘の可能性がある。

遺構の年代については、VI層検出遺構については古墳時代（塙釜式期）に属するものと考えられ、V層検出遺構についてはそれ以降のものであるが、時期的な下限については不明である。

註2) 東北大学農学部 星川清観教授より下記のコメントをいただいた。

発掘物の形態比較から、全サンプルは、同一の植物の果実（種子）の殻皮であると判断される。

種名を特定するためには、資料として困難があるが、長期間土中に埋蔵されていて、なお残存したことから、種類分を多く含むグループと思われる。そうなるとこの形態からはカヤツリグサ科のものではないかと思われるが該当する種が見当たらない。やむなく形態からの推定と、河川縁の水湿地によく生えているなどの点を考慮して下記の草種を想定した。

イシミカワ（タデ科）*Polygonum perfoliatum* L

川べり、草地に生える、1年草、つる性、夏秋開花、果は球形、藍色、径3～5mm

註3) 古川一明：『宮城県宮園場整備等関連遺跡詳細分布調査報告書（昭和57年）－色麻古墳群』宮城県文化財調査報告書第95集 1983年

註4) 太山昭夫：『東北自動車道遺跡調査報告書IV－大橋遺跡』宮城県文化財調査報告書第71集 1980年



写真1 調査区周辺航空写真 (1965年仙台市撮影)

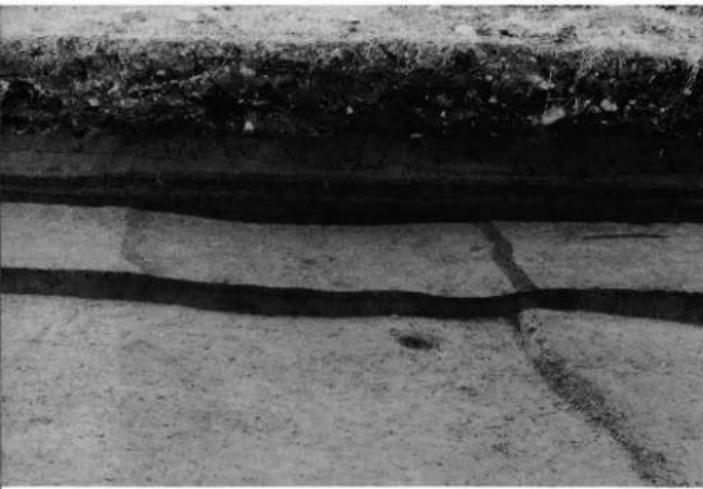


写真2  
SD-1溝跡  
セクション  
(東→)

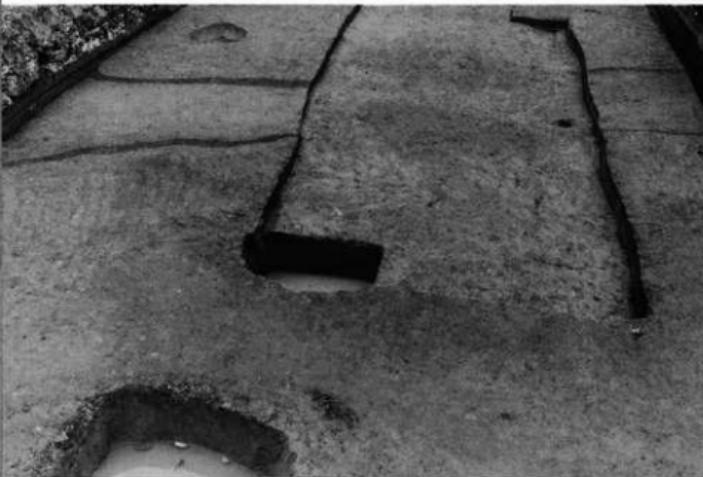


写真3  
SD-1溝跡  
(北→)



写真4  
V層上面検出  
小溝状造構群  
調査区北側 (南→)

写真5  
調査区北側VI層  
上面造構確認  
状況 (南→)



写真6  
調査区南端VI層  
上面造構確認  
状況 (北→)



写真7  
S I - 1 穴造溝  
(南→)



写真8  
SK-6 土坑  
(南→)

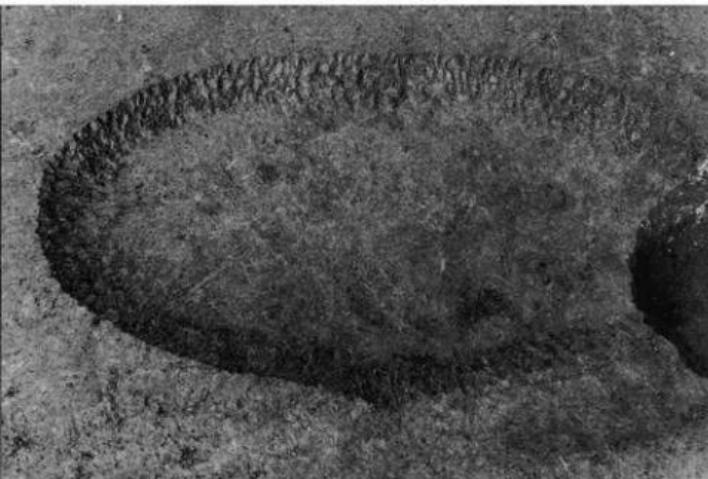


写真9  
小溝状造構群  
A群 (南→)



写真10  
小溝状造構群  
A群、B群  
(南→)

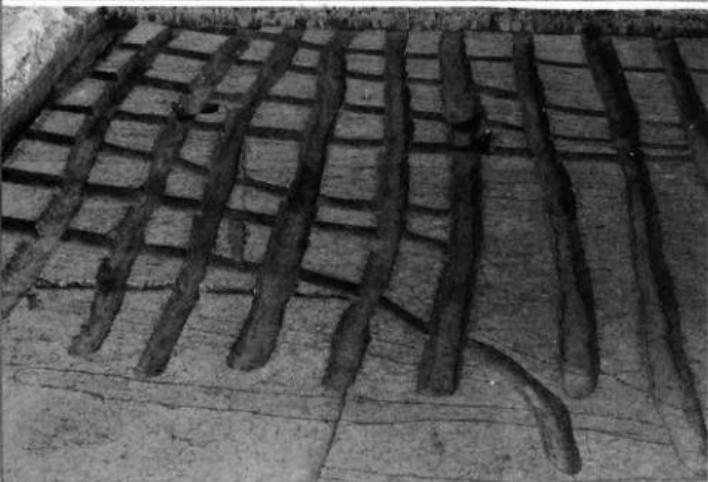


写真11  
調査区北区北半部  
の状況（南→）



写真12  
調査区北区南半部  
の状況（南→）



写真13  
小溝状造構群 E 群  
E'群（北→）





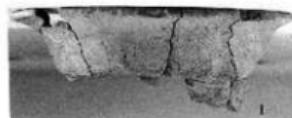
写真14  
小渦状造構群E群、  
E'群、F群(北→)



写真15  
北区西壁  
セクション



写真16  
南区西壁  
セクション



1



2



4 a



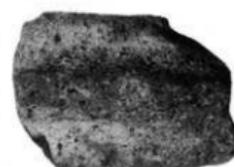
4 b



5



6



7

写真17 出土遺物 1. 第11図1 3. 第16図1 5. 第7図1 7. 第7図3  
2. 第11図2 4. 第17図1 6. 第7図2

## 文化財課職員録

課長 早坂春一

管理係		調査第一係	
係長	鴨田義幸	係長	佐藤 隆
主事	白幡靖子	主任	田中則和
◆	山口 宏	教諭	太田昭夫
◆	佐藤良文	主任	篠原信彦
◆	高橋三也	◆	木村浩二
		主事	吉岡恭平
		教諭	橋本光一
		主事	斎野裕彦
		教諭	高倉祐一
		主事	大江美智代
			◆
			佐藤洋
		調査第二係	
係長	加藤正範	教諭	渡辺雄二
主任	熊谷幹男	主事	佐藤 淳
教諭	佐藤好一	◆	渡辺 紀

---

仙台市文化財調査報告書第138集

### 大野田古墳群発掘調査報告書

平成2年3月

発行 仙台市教育委員会  
仙台市青葉区国分町3-7-1  
仙台市教育委員会文化財課  
印刷 (株) 東北プリント  
仙台市青葉区立町24-24 TEL 263-1166

---

